



日本銀行と私

日本経済研究センター客員研究員

香西 泰

私が社会に出たのは1958年。経済企画庁に採用され、1年ほどで内国調査課に移り、最初は「経済白書」「月例経済報告」などの校正係だったが、その後金融班に配属された。金融班での実際の仕事は、先輩のお供をして日本銀行、市中銀行、証券会社等を訪問し、金融情勢の解説を聞くことだった。日本銀行では大変丁寧・親切に説明が聞け、私にとってはそれが「金融論事始め」だった。

だが役所へ帰ると金融班の報告は概して評判が悪かった。批判の先鋒は金森久雄総括補佐、調査官、内国調査課長で、「言葉で感触とやらを聴かされても困る。はっきり数字で示せ」に始まり、「白書には金融の章は要らないよ」に終わる。金森さんご出身の貿易班が地域別品目別輸出入統計に四則演算を加えて、お気に入りの分析を出す。それを横目にどうせ金融班は落第横丁だとのひがみ気分が高揚するばかりだった。しかし企画庁卒業後、金森さんと一番長く付き合ったのは、その落第横丁の面々だった。

金融界を回ってみると、これもひがみだが、親切か、礼儀正しい

かは別として、窓口で札勘定をしたことのない人間に、金融が分かってたまるかという信念が共通していた。

企画庁内国調査課には優秀な日銀マンが総括班に常駐していた。私の最初の内国調査課時代には田添大三郎、佐藤隆、和栗俊介さんたちで、新兵教育に努めて下さった。調整局財政金融課で一緒にあった天野貞夫さんのことも忘れがたい。2度目に内国調査課に勤務した時には田村達也、樋爪龍太郎さんと苦楽をともにした。

その後もいろいろな機会に日銀の方と接触の機会があった。ここでは二つのことを懺悔しておきたい。ある晩細谷貞明さんと飲みに行った。その席で彼はぼそぼそと「B I Sの自己資本規制問題について日本は土地価格が簿価以上だから心配ないというのだが、国内で信用節度を説いている中央銀行はこの主張でよいのか」と言い始めた。私は「サラリーマンの正論は通らない。いや辛いねえ、ご同役」という反応しかしなかった。氏が急逝されてB I S規制の交渉に関わられたと知り、氏は自由な立場

の私に問題を世間に訴えてくれと言いたかったのかもしれないと思うと、その苦悩を察せなかった自分が恥ずかしい。

もうひとつある。2000年8月にゼロ金利をやめたのが米国ITバブルの破裂と重なり、2001年3月には量的緩和で事実上これを復活した。これで日本銀行は批判を受けた。日銀参与だった私はゼロ金利中断に賛成だったので、その点では非難されても仕方がない。ただ私の考えは、金利を一切動かさないと寝たきり症状が出るから動かせるときには動かすべきで、2000年早くにゼロ金利を離れ、さらに春にもう一度市場金利を上げて、次に緩和が必要になるときの「糊しろ」にすべきだというものだった。実施が8月までずれ込んだこと、一度やめたら復活しないとされたことは私の本意ではない。金融政策は金利操作をフォアワード・ルッキングに運営すべきという意見が流行だが、長期的視点は必要だが臨機応変も不可欠であり、その点は量的緩和のほうが動きやすいという気もする。いや、金融ど素人の意見、ご笑殺ください。